

第2回「東京電力福島第一原子力発電所事故に関する調査委員会」(学会事故調) 議事概要

日時：2012年9月4日(火) 13:30～17:20

場所：発明学会ビル セミナー室

出席者：

(委員長) 田中(知)

(幹事) 関村、田中(隆)、宮野、諸葛

(委員) 青木、阿部、井上、内田、大場、岡本、小川、片岡、河井、木村、久野、越塚、
小西、五福(代理 東芝滝澤)、佐相、佐田、須山、高橋、中島(健)(代理 大阪大学北田)、
中島(憲)、平野、藤巻、本間、百瀬、山中、山野、林道

(説明者) 政府事故調査委員会 小川事務局長

(オブザーバー) 野村会長、堀池、澤田

(各部会等からの出席者) 41名

(事務局) 荒井、富田

1. 田中委員長挨拶

- 本日の議事について説明があった。

2. 東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会(政府事故調)報告について

- 政府事故調の小川新二事務局長より、約2時間の説明があり、その後、学会事故調との間で約1時間にわたり質疑応答が行われた。質疑応答の中で示された主な回答は以下の通り。
 - 設計改善については専門的知見を踏まえて具体化すべきとの判断から、具体的な提言はしていない。
 - 計測器の指示値については様々な検討を行った。水位計は原理的な理由で炉心溶融時には明らかに指示値を疑うべきであったが、事故の初期対応の段階で、当事者の中でそれを具体的に指摘した者はいなかった。他の計測データについては、明らかに異常だと判断されるもの以外はそのまま使用した。
 - 調査のベースとした情報は基本的に全て公開されている。何を用了のかは報告書に記載している。インタビューの生情報については非公開とすることを前提に相手先の承諾を得たものであるので開示できない。しかし、それに基づいて把握できた事実については、基本的に報告書に記載している。
 - 避難指示がされなかったとの報道もあったが、調査したところ、通信手段が混乱していたこともあって連絡がTV報道よりも遅くなったため、避難指示の連絡と受けとられなかった場合が多いようである。電話連絡をとって避難指示を伝えようとい

う努力はなされていた。

- SPEEDI は、3月15日当時の具体的な状況を踏まえると、単位放出による解析であっても線量の高い方向への避難を避けるのに活用できたと考える。
- 事故時の対応体制についての問題点は指摘しているが、具体的にどのような体制にすれば良いかまでは書かなかった。専門家の検討に委ねたい。今回の場合、指揮する立場の人が、情報が不十分な状態で指揮せざるを得なかったことに大きな問題があったと認識している。
- 捜査や調査では現場調査が基本であり、今回も可能な範囲で現地調査は行ったが、線量の高い場所に入ることはできず、十分な分析ができなかった。したがって、入手可能なパラメータやデータの分析や関係者のヒアリングが調査の中心となった。
- 調査の結果により、責任が明確になることもあると思うが、それを恐れて原因追及が疎かになってはいけない。責任追及を目的としないと言っても、結果的に責任が明確になることがあり得ることは当然のこと。
- 政府事故調では、規制組織、防災組織を具体的にどうすべきかまでは論及していない。それぞれの組織にどのような問題があったのかをまず検討した上で、一般的にどうあるべきかについて論じている。
- 学会事故調に期待することを纏めると以下の通り。
 - 事象・事故の進展でまだ十分解明されていない部分が残っている。これを専門家の目で解明してほしい。
 - 他の調査結果と食い違っている個所もいくつかあり、専門家の立場から、学会事故調で可能な範囲で分析・検討されることが有用ではないか。
 - 政府事故調は具体的な安全対策の改善策については踏み込んでいないので、専門的知見を集めて検討し、是非、具体的に提言してほしい。

<ここで、小川事務局長は退席。>

3. 前回議事録の確認

- 前回議事録について承認された。

4. 運営方針等について

- 学会事故調の目的について、表現をクリアにするため、別途調整することとなった。それ以外について了承された。

5. 検討項目と検討体制について

- 学会事故調の報告書に入れるべき項目について、各部会等が担当すべき細目と検討スケジュールを提出し、次回委員会でその回答を基に議論することとなった。

6. その他

- 次回第3回「東京電力福島第一原子力発電所事故に関する調査委員会」(学会事故調)は、秋の大会の開催に併せ、9月20日(木)17:00~18:30、広島大学にて開催する。

以上